



Title	社会理論としての民謡：日本のオリエンタリズムを超えるために
Author(s)	竹中, 均
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/41249">https://hdl.handle.net/11094/41249</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	竹中均
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第 14311 号
学位授与年月日	平成11年3月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	社会理論としての民藝 —日本のオリエンタリズムを超えるために—
論文審査委員	(主査) 教授 厚東 洋輔 (副査) 教授 橋本 満 教授 伊藤 公雄

### 論文内容の要旨

本論文は、一般に美的趣味の世界のものと思われてきた民藝を、現在の諸問題にも対応しうるような社会理論として読み直す試みである。

小熊英二は近著『日本人の〈境界〉』において大正時代にはじまる柳宗悦の民藝運動を屈折したオリエンタリズムとして批判している。しかし果たして柳の思想と行動をそういう形で総括するのは適切なのだろうか。

この問題を考えるためにまず第一章では、いわゆるオリエンタリズム問題をどう扱うべきかという点について論じる。サイードがそのオリエンタリズム批判によって目指したのは何だったのか。サイードの論に対しては、西洋の帝国主義的野望を暴露するだけの表面的な批判にすぎないとする評価があるのは確かだが、サイードの真のねらいは、根本的な水準における認識論的批判である。この点を理解するためには、ギデンズの構造化の理論を利用するとよい。この観点によって、オリエンタリズムの問題とは、ギデンズのいう「実践的意識」の問題であることが分かってくる。

つづく第二章において、柳宗悦の民藝理論が、この「実践的意識」の問題と深く関わっていることを主張する。ギデンズの構造化理論と重ね合わせることによって、民藝は、日本のオリエンタリズム批判としての理論的可能性を与えられる。日常性を捉えるのに適した社会理論を模索するギデンズの取り組みは、時・場所・ジャンルを越えて、柳の〈日常性の美〉発見の経緯と結びつけることができるのではないだろうか。

だが、筆者がこのように主張しても、おそらく多くの読者は、民藝などというものはそもそも直感的美学のたぐいであり、そもそも社会理論とはかけ離れている、と考えるだろう。むしろ、同時代の柳田国男の仕事の方がはるかに社会理論と縁が深いのだ、と。しかし、社会学者有賀喜左衛門は、周知のように柳田から強い影響を受けただけではなく、柳からも多くを得ていたのである。そのことを論じたのが、第三章である。

有賀は、柳の民藝觀からある要素だけを選択的に継承し、それに新たな解釈を加えながら、彼独自の自給的民具イメージ（農民の創造的能力の発現としての）を作り上げていった。そのようにして継承されたものは、民具研究だけにとどまらず、彼の主要業績である家・家連合理論の形成にも、間接的ながら影響を与えた。有賀にとって柳宗悦との出会いは、克服されるべき青春期の一エピソードではなく、生涯にわたって理論形成のためのインスピレーション

の源泉でありつづけた。

だが近年、民藝的なヒューマニズムに対して、多くの批判が向けられるようになってきた。冒頭で紹介した小熊は、その一例だが、彼に限らず富山一郎や太田好信も、柳批判の急先鋒にたっている。その際、最大の標的となるのが、1940年前後、柳らによって展開された「沖縄方言論争」である。しかしそれにもかかわらず、柳の沖縄観には、自文化・異文化理解のうえで、学ぶべき点が未だにあると筆者には思われる。民藝のまなざしは、単に『白樺派』的ヒューマニズムの精華というにとどまらず、幻視ともいるべき連想の飛躍によってもたらされたものではなかつたか。そこから生まれるイメージの交錯にこそ、批判としての美的社会理論生誕の可能性があった。この点について論じたのが、第四章である。

だが、時代の大きな流れのなかで民藝もまた、致命的になりかねない危機に直面せざるをえなかつたのは事実である。その頂点をなすのが、いわゆる「満洲」における民藝運動の展開である。マイノリティの文化を擁護しようとする民藝的ヒューマニズムが、少数民族としての満洲族という特異点に関わったとき、日本による「満洲国」建国の理念にからめ取られかねない危険な理路が開かれていた。この点について、二つの事例によって検証を試みたのが、第五章である。そこでは、民藝運動に良くも悪くも医療的まなざしが潜在していた点に焦点があてられる。もし民藝を根本的な意味でオリエンタリズムとして批判しようとするならば、既に取り上げられている「沖縄言語論争」のような明示的な例ばかりではなく、〈民藝において医療的まなざしがいかなる働きをしていたのか〉というたぐいの一見見えにくい論点にも目を向ける必要がある。そのためにも「満洲」問題への取り組みは不可欠であると思われる。

このような限界を持ちながらも民藝が社会的批判理論として可能性をもつと筆者が考えるのは、第六章で論じるような、日本の美的自己像の歴史に対する強力な批判、そして、それと密接な関係にある朝鮮半島の文化に対するまなざしのゆえである。ここに柳の日本社会論の核心がある。現在の美学美術史において当然のように高く評価されている桃山文化に対して特異な批判を投げかけることによって柳は、間接的ながら、近代日本のありようを批判したのである。近代日本は、自らの文化を形作る上で歴史的に重要な役割を果たしたはずの朝鮮半島文化の記憶を〈忘却〉することによって、文化的自己像を作り上げてきたのだが、柳は民藝の主張を通じてこの〈忘却〉に警鐘を鳴らしたのである。この批判的姿勢こそ、「昭和の利休」と呼ばれていた柳が、ほかならぬ利休とその茶道を厳しく批判した本当の理由だった。

冒頭に挙げた小熊や富山たちの民藝批判は、広い意味で、カルチュラル・スタディーズ的視点からの批判といえるだろうが、それは果たして妥当だろうか。カルチュラル・スタディーズは、民藝に政治性が欠如していたことを批判するが、むしろ、柳理論こそ、時代のなかで例外的な政治性を発揮し得た理論ではなかつたか。それが可能だったのは、民藝が（一般にそう思われているような）伝統主義・復古主義ではなく、むしろ文化の現在性、その移動形態に焦点を合わせた理論だったことによる。筆者はそこに、グローバル化する現代文化の問題を論じるのに適した理論的可能性が読みとれるのではないか、と考えるのである。

## 論文審査の結果の要旨

E. サイードの『オリエンタリズム』が刊行された1978年以来、オリエンタリズムの問題は世界中で繰り返し議論されてきたが、本論文は、近代日本という文脈に視野を限定し、オリエンタリズムの問題を理論と実証の両面から説得的に議論することに成功した、社会学におけるパイオニア的業績である。本論文のオリジナリティーは、とりわけ次の二点に求められる。一. オリエンタリズムを「社会学」の問題圏域のなかで議論するために、A. ギデンズの「言説的意識」と「実践的意識」の区別を用いて、オリエンタリズムは、明晰に言語表現可能な「言説」レベルにあるのではなく、暗黙的にしか知り得ない「実践的意識」のレベルに位置づけられるべきものであることを、理論的に明らかにした。二. オリエンタリズムをその具体的様相に即して実証的に議論するために、「民芸運動」の創始者として名高い柳宗悦の社会認識というきわめて興味深い問題設定をしている点である。柳の社会認識というテーマは、実践的意

識に視座を据えることによってはじめて浮かび上がるものであり、また民芸運動から推測される柳ではなく、柳自身のテクストと実践を直接議論することにより、柳研究に新しい境地を切り開くことに成功した。

本論文は、今後の更なる展開が楽しみなフレッシュな力作であり、社会学におけるカルチュラル・スタディーズの今後の可能性を示唆する業績として、博士（人間科学）の学位に十分に値する。